

---

# でかいやつ

京理義高

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

でかいやつ

### 【Nコード】

N3247K

### 【作者名】

京理義高

### 【あらすじ】

でかいやつがどうやって人生を歩んでいくかを示した小説です。リアリティーは30パーセントぐらい。残りの70パーセントは成り行きで割り食っているでしょうか。結局、考えても答えは出ませんでした。

## 上巻：舞台前

夏休みは栄太郎にとって心躍らない期間だった。学生に訪れる自由な三十日余り、どの生徒も待ちわびているといった輪に入れず、期間中は東北の田舎に身を隠すように過ごしていた。帰って来ると決まって、三センチ伸びる身長を恨んでいた。例外なく、今年の高校生活最後の夏休みも三センチ伸びた。

海岸に程近い高校での卒業式、栄太郎は最後尾から生徒を見下ろしていた。眺めから優越に浸れたのはわずかな時間である。下級生が栄太郎を希少価値のある動物を見るかのような眼差しを向ける。ただ、別れを惜しむ雰囲気は下を向いてやり過ごすことを許可してくれた。

居間にある支注に刻んだ鉛筆の跡が天井に近付かなくなった。桜の開花と共に栄太郎の成長は止まった。自前の測定器が不要になった栄太郎は感極まって鴨居に後頭部をぶつけた。母親は、

「気を付けなさい」

と呆れ顔で言いながら、オーダーメイドで購入したスーツを渡してきた。栄太郎は袖を通し、鏡で写した。あらゆるポーズをとっては自分の姿を確認していた。

「背が高過ぎるので、サービス業には向いていませんね」

初めての就職面接で言われた言葉だった。後にも先にも、明確に言われたのはそれっきり。しかし、栄太郎が大多数の他人の代弁に過ぎないと思い込むまでに時間はかからなかった。

ある日のこと、ふと目に留まったのは地方の新聞誌だった。栄太

郎は移動サーカスの団員募集に興味を持った。記載されていた条件は身体の大さを求めているからだ。

ぴったりしたスーツに湾曲させた体で行きついた場所には、建設中の大きなテントがあった。その前に堂々と腕を組んで佇んでいるハーフラシき男がいる。栄太郎はハンサムで紳士的な男が苦手だった。視線から離れようとした矢先である。

「こつちだ」

声を掛けてきた。案内されたの大きなテントの影に設えてあるプレハブ小屋だった。事務所にしては寂れている。インスタントであることは火を見るより明らかだった。

彼は面接官だった。栄太郎の身体を舐めまわすように見ると、机の上に足を置いた。

「スポーツの経験もないんだな？」

履歴書の欄を見ながら聞いてきた。栄太郎は黙って頷いた。溜息で返してくる。

「無気力な若者ってさ、多いんだよな」

栄太郎は横柄な態度に愕然とした。不良に絡まれたとしても、眉を潜めた表情を向ければ雑な扱いはされなかったからだ。もちろん、腕力で負ける気がしなかった。

「特技は？」

秀でた芸は思いつかない。何かに熱中した経験がない過去に自己嫌悪している暇は無かった。答えるまでの間に『木偶の坊』や『言

葉通じているの?』という罵詈雑言を浴びせてきた。

耐えきれなくなり、口を開いた。栄太郎は体が柔らかいと言った。怪訝な表情を見兼ね、前屈で地面に掌を付いた。精一杯のパフォーマンスである。震える全身が悲鳴を上げ出しても、そのままの状態を保持した。

「もういい。俺は宇賀理だ。後はトレーニングをさぼっている志村に聞け」

宇賀理が顎で指していたのは建設中のテント内だった。

同じ平面に付いた足、栄太郎は目を疑っていた。志村の視線は栄太郎より五センチ上にあつた。つまり二メートル七センチぐらいはある。体格も一まわり大きい。

「引退だよ」

見るなり、くぐもった声で呟き、練習場を見渡した。

「サーカスの主役にはなれなかった。だかな、これなら目立てたぞ」

存在自体が目立つ栄太郎にとって、その言葉は衝撃を与えた。

何言っているんだこの人? とは口出せなかった。志村がこれ、と言って触れたのは、近くにあつたガラス製の水槽だ。準備運動をしているかと思うと、ミシッと音を立てて肩の関節を外し、巨大な体軀は水槽の中に吸い込まれていった。

唸り声を上げている。水槽は平均的な成人男性でも入れないのではないかと思われる体積である。露出している肩の皮膚が、透明な窓ガラスに巨大なナメクジが貼っているかのように映る。出てくる姿を見てもしばらくは未知の生物を見ている感覚になっていた。

志村が発する骨の摩擦音で我に返った。肩の筋肉をほぐし、首を回した。

「この芸はな。ガラス詰め of 巨体ってな名がある。このガラス箱は商売道具だ。過度の圧力がかかれれば割れて怪我する。俺らみたいな人間ならなおさら気を使うべきだ」

栄太郎は、『俺ら』という言葉に肩を揺らす。満足気に言う志村は額に大粒の汗が浮かんだ。それを丸太のような手で拭った。

「宇賀理にはいろいろ言われただろ？」

目を逸らした栄太郎は黙っている。志村は勝手に納得した。

「あれはサーカスのキャラクターだ。本当は優しい奴でな。明と暗の原理を尊重する団体なんだよ。わかるな？」

栄太郎は思わず笑顔になった。彼にも伝染し、やがて高笑いが練習場に鳴り響いた。

実家から通える距離をあえて住み込に決めた。サーカス用に作られている仮設住居には住所を持たない者もいる。テレビやパソコンはなく、薄っぺらい壁にプライベートはないも同然だった。

志村に案内された控え室ではサーカス団員がたむろしていた。大量の薬を昼ご飯代わりにかつ込む者や、鏡の前でひとり言を発しながら体を動かしている者、ご飯を食べずに瞑想している物もいた。

「あいつは減量しているだけだ」

聞こえる志村の声にもまったく反応しない。冷たい視線をちらりと向けて、直ぐに自分の世界へ入りこんでいく。栄太郎を快く迎え

たのは志村だけだ。

「自己紹介は必要ない。名前を憶えてもらいたかったら目立つしかないんだよ」

終始、志村が目立つことに拘った理由を理解した。何もしないで目を引いてきた自分、それを一時で失ってしまうと、栄太郎に寂しさを与えた。

最初の練習といえば柔軟体操中心だった。中国雑技団のような軟体を持つ団員もいる。しかし、栄太郎の得意としている練習ばかりではなく、団員がこなしているトレーニングメニューは若さだけでは到底体力が持たなかった。栄太郎は何度も嘔吐し、動かない身体を拳で叩いた。

栄太郎が入団して二カ月後、多くの観覧客がテント内に集まった。

「良く来てくれたな！」

悪魔メイクをした宇賀理の進行でサーカスは始まった。客はその乱暴な扱いを歓喜している。

アクロバットなパフォーマンスが続き、ピエロが笑いを取った。子供から大人まで魅了する。ガラス詰め of 巨体と名が付いた志村の演目は最後だった。

志村が最後の舞台になることは誰も知らなかったらしい。現れた志村は目を瞑って深呼吸した。司会進行を務めていた宇賀理は、急に声を潜める。ざわめきの余韻が一瞬にして消え去った。

「彼は当団体が始まって以来、ずっと演者としてやってきました。体に似合わず気遣い屋であり、俺が助けられた場面も少なくありません」

マイクを向けられた志村は、手を横に振って制し、運ばれてくるガラス箱の前に立った。

志村の背中に当たるガラス部分に亀裂が入った。舞台裏から見える程度で済んだのが幸いだった。大量の汗がやがてガラスを曇らし、歪んだ表情を手で覆っている。栄太郎はいつもとは違う志村だと感じていた。

ゆっくりとした動作で立ちあがり、志村は両手を広げた。少数の人が拍手し、すぐに全体へと広がった。

「鼻息荒いから曇っちゃいました……まあ、引退しても食いつぱくはないでしょう。この巨体ですから飯を沢山食べますからね」

「それは、食いつぱくがないとは言わないでしょ」

宇賀理が慌てて突っ込みを入れた。笑いと共に、感謝の声援が飛び交った。宇賀理から花束を贈呈され、抱き合い、大粒の涙を流した二人で幕が閉じた。栄太郎は涙を湛えた観客も含め、すべてを目に焼き付けた。



## 下巻：舞台後

静まったテントの中、栄太郎はガラス箱に挑戦していた。ガムテープで亀裂を補強し、充分な柔軟体操をこなし、区戦の末、箱に収まった。

しかし、安堵は続かなかった。どう体を動かしても箱から出られなくなつたからだ。亀裂部分は広がり、ガラス面は放物線を描きだしている。もがき、ガラスが爆ぜる手前。

「無茶すんなよ」

箱の側面を取り出したのは宇賀理だった。鍵を使えば四方の壁が解除出来る仕組みである。

「お前にも病院送りになつてもらつたら叶わんぞ」

呆れた宇賀理に誰が病院送りになつたのか聞いてみた。志村は肩を脱臼していた。骨を元に戻せなかったのは、筋肉まで切れていたからだ。車で帰宅したとばかりに思っていた栄太郎は教えてもらった病院に駆け込んだ。

「大袈裟なんだよ」

包帯を巻いたＴシャツがいびつに盛り上がっている。強張らせた口角を向けると、志村はベットからはみ出ている足の指を上下に動かした。

「見舞に来ている時間は無いぞ。一週間後には俺の代役だからな」

それを聞いた栄太郎は動きが止まっていた。高なる鼓動、青白い顔、傍目からすれば、どちらが病人なのかわからないだろう。

「怪我は年のせいで硬直してきたからだ。本番は特に辛い」

栄太郎は練習をして成功寸前のところで、宇賀理に助けられたことを話した。

「早く出て行け！」

声が響き渡った。病室に駆けこんできた看護婦に対し、

「何でもありません」

と言う。栄太郎は入れ替わりで後にした。

限られた時間での、サーカス会場の引越し作業と練習は流動的な雑念を排除し、むしろ栄太郎の向上心をかき立てた。手助けなくしてガラス詰め of 巨体 to 成功し、宇賀理他にも名前で読んで貰えるようになった。

栄太郎の初舞台は海沿いの公園だった。ビル群が立ち並ぶ中、都会にあるオアシスのような場所である。そこでの野外サーカス、通行人でも無料で観覧出来るサービス付きだった。控え室で身を潜めている団員全員が集まっていた。しかし、引退したはずの一名も加わっている。

「ボロ小屋を揺らすな」

志村は包帯姿で駆け付けていた。怒鳴ったことをまったく失念し

ているのだろうか、フレンドリーに接して来る。栄太郎にはどうでも良くなっていた。

「でかいから、貧乏揺すりでも地震になり得るんだよ」

と言うと、団員は爆笑した。ふざけて踊り出す団員さえいる。志村は地方新聞を広げると、目を落とした。

「逃げたい……」

栄太郎は聞こえない程にひとり言を言った。体は舞台と逆の方向に進んでいる。

「最初はそんなものだ」

達観している志村は言う。しかし、素直に同意する余裕はなかった。外には高校時代の同級生も見に来ているかもしれない。そう思っただけで今までの練習成果が失われる感覚に襲われた。栄太郎の足は裏口まで進んだ。

「ただな、逃げてしまえば、次に同じ場面に出くわした時、倍以上の重圧と戦う羽目になる。お前に耐えられるか？ 耐えられるなら今すぐ逃げてみる」

栄太郎は裏口を出た。

晴天が動員数を増幅させた。あいも変わらず口の悪い宇賀理のアウンスは市長の参加を紹介した。人だかりが人を呼び、演目を終えた団員がなるべく場所を取らないようにと規制する状態にまでなった。

栄太郎の記憶は新人紹介を受けた後から数十秒間消えていた。早

すぎる登場タイミングは観覧客の失笑を買っていたとしてもわからずにいた。

理性とは裏腹に、栄太郎は体が勝手に動く体験をしていて、霞んだ目で大勢を見やった。

すべてが志村のマネ事だったとしても、暖かい眼差しで冷静となり、堂々と両手を広げた。

志村の一件以来、内密でガラスの強度を増した箱を用意してくれた宇賀理のトリックは成功していたのだ。

演目を成し遂げた高揚感は背骨からの鈍痛をも凌駕していた。

控え室に戻ったら、志村の姿はなかった。地方新聞チラシの余白にこう書かれていた。

まだまだだな

折り曲げて、ポケットに仕舞った。

サーカスの片付けをしている栄太郎の背後から肩を叩くものがあった。

振り返ると、同級生がいる。彼は女性が友達を引き連れて出かけるのが当たり前を自負していた。一人でデートスポットを徘徊する奴は考えられ無いとまで言っていた。栄太郎の苦手なハンサムで紳士を演じている男だ。

「あんな特技知らなかったよ」

栄太郎が不思議がっている様子を見てから頭を掻いた。

「今度さ……遊ばないか？」

自分の顔を指さす。彼は頷き、邪魔になるからと言って立ち去った。

近くの居酒屋で打ち上げとなった。ジュースを飲んでいる栄太郎を除き全員大酒飲みだった。石像のように無口だった団員が饒舌であり、練習中は吸わなかった煙草に火を付けている団員もいた。

終電間際になっても盛り上がりは陰りがなかった。栄太郎は酔い潰れた宇賀理をタクシーまで導いた。

「演技、中々良かったな」

重くなった瞼をやっと開いたかのような彼が言ってきた。

栄太郎はマクロまで見えた客観性を得ていた。それは学生時代までに向けられた視線に耐え、ひた隠すベクトルが強大となり空に籠ったり、時にはナルシスティックなまでになった栄太郎の殻を破っていた。

「次はもっとすごいもの見せますよ!」

「お前はペルソナか?」

宇賀理は見上げて聞いてきた。

「明と暗の原理ですね」

頭を垂れた宇賀理はタクシーに揺られ、相模に向かった。栄太郎はいっつまでも手を振り続けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3247k/>

---

でかいやつ

2010年10月13日15時39分発行